
公園の鏡

阿山利泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公園の鏡

【Nコード】

N6993A

【作者名】

阿山利泰

【あらすじ】

公園での話し。これ以上語るのは無粋だね。続きではないですが、公園の月とも関係があります。

私は自分が嫌いだ。

だから自分を写す鏡も嫌いだ。

人との差を認識してしまうから。

だから私は鏡も嫌いだ。

私はいつもの公園で、

コンクリートでできた段差の高い階段の三段目に座っていた。
その階段はその高さを利用した滑り台が横に設置されている。
見晴らしがよく、居心地もいい、

私のお気に入り場所だ。

今は午前中この暑い季節まだ暑くなる前の時間だ、
カラッと乾いた空気に穏やかな風が吹く、
公園の中央にある一番大きな木がざわめく。
今日もいい天気になりそうだ。

地面がチラチラと光っているのに気付いた、
見るとちくちく眼に刺さるまぶしい光だ、

まだ無人の公園に何かが落ちている。

なんだあれは？

遠目からは眩しくて確認できない。

何となく気になった。

ポテッポテッポテッと階段を降り、

近づいて何か確認しに行った。

階段と大きな木との中間の距離、

手鏡だつ、ピンク色の取っ手に花柄の手鏡。
可愛らしい鏡なこと。

すす汚れているが、十分使える鏡だ。

昨日この公園で遊んでいた子供が忘れていったのだろう。
覗き込む、自分の姿が鏡に映る。

覗き込んでいる猫の姿が…。

自分のこの姿をどれだけ呪った事か。
いつ見ても酷いナリね。

その鏡を残した階段の上へと駆け上がる。

忌々しい自分の姿を思い出す、何も付いてない寂しい首元…
一人取り残された手鏡が青い蒼い空を映し出す。

私は自分が嫌いだ。

だから自分を写す鏡も嫌いだ。

『人との差』を認識してしまうから。

だから私は鏡も嫌いだ。

（後書き）

はい

読んでいただいております阿山利泰です。

前作と言うべきか、公園の月を読んだと『私』がバレバレの作品で面白さ半減ですが

短編なのでどこから読んでも驚きがあるように毎回『私』は伏せるつもりです。

切り離しても楽しめるようにしたのですが

なかなかそこまでの技量が無く、伏線は回収したく連載に載せるべきだったと後々後悔しています。

短編が繋がっていても滑稽なので”次”か”次の次”に締めたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6993a/>

公園の鏡

2010年10月10日03時09分発行